

戸田甚一が同人誌『囁き』に投稿した20の作品

塩 原 将 行

本稿は、1918年（大正7年）5月から1919年（大正8年）2月までに、北海道石狩市厚田区（旧厚田村）で発行された同人誌『囁き』に戸田甚一が投稿した20の作品を紹介する。本資料に関しては、本紀要本号の拙稿「支部沈黙と戸田甚一——戸田が同人誌『囁き』に投稿した20の作品を手掛かりに——」において、詳述しているので参照されたい。本稿は、加藤郁代旧蔵の『囁き』第1号から第13号までを底本とした。

凡 例

- 一 原文は縦書きであるが、それを横書きに直した。
- 二 本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については新字体に改めた。
- 三 複数字分の繰り返しを示すおどり字は、ゝゝ、或はゝゞと字数分表記した。
- 四 誤字、誤植、誤記と考えられる個所には（ママ）と表記した。
- 五 脱字と考えられる個所は、〔 〕で加えた。
- 六 判読できない文字は、■と表記した。

（本文）

《作品 1》

寂しき厚田

櫻 桃

丁度店用を帯びて山方面へ出張した時のやうな気持がしてゐる。

さつぱり厚田へかへつたやうな気がしない。父に遇つても、母にあつても同じだ。先生に遇つても同じだ。

去年なら厚田へかへりたくてゝゝゝゝゝゝ、住み慣れた村が見えたとき、胸がどきどきしたもののだが、今年はどうしたのだらう。先づかう感ずる前に、厚田は大変さびしいと感じた。胸の動悸さへしない——郷里はさみしい。何のわけだらう。どこが違ふのだ。

土地の地形は去年と何も違つたところはない筈だ。厚田神社の鳥井^{（ママ）}はむしろ立派になつてゐる。三吉山は矢張り三吉で厚田川は厚田川で滾々として流れてゐる。学校は学校である。鯁は例年よ

りもとれたのに何故だらう。知人知己の少ないためだらうか。知人では支部先生、友人では村上君だもの尤もだ 妹も居ない。兄や姉はまだ先が長い。何時でも遇へると思ふとさうあひたいとも思はない。土台あふといふ外には、話といふものがない。だからあひさへすればそれでよい。遇ふ位なら何時でも遇へる、遇ふだけでは寂しいもんだ。

話す友、遇ふべき友さへゐない。まだゝゝ寂しい原因がある。それは父と母だ。僕は父や母に大変愛されてゐる。通常人の子としてより以上だらう。だから僕は雨につけ、雪につけ人より以上両親を忘れない。去年病氣中斯んな句を作つたのを記憶してゐる。

床の中そこはかたく想をば

はせれば父の姿ちらめく。

自分は父母に対しては早く安心させねばならんといふ觀念が先だつて遇ひたいといふ觀念が後だから寸の功尺の績のない身では、大きな顔してかへられないと思ふと何となく氣後れがした。氣後れがしたが動悸がなかつた。父や母と一緒に居る間は、厚田の寂しいのがわからないが、一人で友を探せばつくゝゝ厚田の寂しいのを感じる。

支部先生と村上君とは確かに遇ひたい。遇ふといふ外に話があるからだ。二人 ^(ママ) 意 外に遇うて話す先輩も友人もない。厚田の山川は同じだが友がゐないから寂しい。いやそればかりでない。骨のある人間がゐないからなほ寂しいんだ。友がなくとも骨のある人間が居つたら厚田は賑ふのだ。意見も敲く、処世訓もきく、意氣と豪氣に富む言葉の流れにも浴せるだらうから。さうならば自分も寂しくないと共に厚田も寂しくないのだ。然し現在では自分は友なくして寂しいと共に、厚田は人なくして寂しい。

寂莫御寺の墓場のやうだ。料理屋の門を出入するより外に何の藝もない人を見るといやになる。彼等は飲むだけの力があるだらうか。飲みやうに依つては全然排斥すべきものでもないが。国家多端の男子は現在の厚田青少年の様なものでよいのだらうか。明治維新時代の青年は飲んだ。料理屋に於いても、家に於いても飲んだ、さういふ人達によつて、日本の今日の土台は作られた。飲むのはよい、飲め、一升、二升と男らしく国家の前途、東洋の位置、世界今後の形勢でも語りながら心中一片の男子の意氣と、國士の心掛とを持つて當時の士が絶えず三寸の胸裡を往來するものは、天下経綸の策國恩に報ずるといふ一念よりなかつた。此の一念、此の策以て今日の日本が生れた。生れた日本を誰が育てた、弊衣破帽の苦学生だ。其後三代を享けて立つものは、唯これ、今日の青少年だらう。意氣なくして何とする。大日本帝国としての覺悟を持つてゐなかつたら、厚田村民として位ゐの覺悟を持つてもよいだらう。一夜飲む金で豚の子でも兎でも飼つたらいい。此の調子ではとても駄目だとかう思ふとまた寂しい。墓場以上に寂しい。墓場でも月あればなかゝゝ賞すべきに足る。それが厚田にない。夜の物置小屋のやうなさびしさだ。

(第4号<大正7年5月号>掲載)

《作品 2》

顔知らぬ友の病めるを聞きて

あかん坊

顔も知らぬ性質も知らぬ名も初めて聞いてそれで彼は我が友だ、
身は北國の一寒村に生れて拾七年何ヶ月暖き親の懷中恋しともせず師範学校二ケ年の生活敢て樂しとせず遺る二ケ年の平和と終生安樂なる可き月給といとも清き天職とを弊履を捨つる如く打ち捨て絃を切つて放ちし矢の如くに満腔の野心五尺余の体に載せて帝都の只中に……青春の客氣が充分の成算ありてか……知らず其の内の消息は野心たる何か自己百年後の安逸の爲に順当定まる出世の段階を厭ひ裏通突発の計画が日本帝國の現在を思ひ、陛下に、国家に盡さん、燃ゆるが如き忠君愛國の心を發露せしむる適當なる場所を得可く、今日の苦をば辞せざるのか、知らず兩者を兼ねるのか。

されど我れらが目に寫れる彼れは見るも男々しく、奮闘せしよ、晝は己れの口を糊す可く夜は學びの庭に足踏み入れて一日として怠らず一年の歲月足らずとして奮ひし彼の此の意氣や田舎出の■惑もされず^(ママ) 隋落もせず而して大いに修むる所ありと聞いても我れとて快心の笑や漏さど置く可き好事魔多し月に叢雲花に風鳴呼！天この男々しくも優さしき一少年に^(ママ) しみせぬか内至を苦を與へて身心を鍛鍊せしめ後大命を下さむ意か俄然彼の頭上に病と言ふ一大鉄鎚を加へり此の鉄鎚重からずと雖へども十九の春の桜のその如く人に惜まるゝに^(ママ) 悲ざるか肉体的に非ずとも精心的に……否々身は一つの杞憂ならん男子志成^(ママ) を^(ママ) ず■して如何で死す可き冥して靜かに彼を想へば彼が出郷の姿髪髯として現る彼は功なさずば再び故山の土を踏まずと誓ひしならん其の誓ひし刹那の觀念や前途の大を思ふて今日親も捨て、友も捨^(ママ) しならん其男々しくいぢらしき彼の心根病床他郷なれば唯人で慰ぐさむる只書を姉にして以て僅か慰め得たりと我れ姉にせし彼の書によつて彼我知り其心情を^(ママ) 櫛しても我れをして一滴の涙を落さしむ恋々として何なすなくして故山を離るあたわず良村民良町民たらずして文士の曰く儒夫たるに比しては數等らずして生死を定むと其の意氣や眞男子なり姉の曰く彼を当地に引かなむと来れ〇〇よあかん坊汝に守してもらはむに汝の澆漓たる男子の意氣汝の苦を辞せざるの健闘友とせずして可なるべきや、嗚呼我が友よ病の試験場を突破せよ^(ママ) 隋落する勿れ、汝の功成るを待つは父母のみに非ざるなり

(第5号<大正7年6月号>掲載)

《作品 3》

若人

あかん坊

勤めすまして只一人
春の日影の窓にさす
南の庭を前に見て
心ひろ^(ママ) > > 一日の
苦勞やりにし男の子あり

彼の心の血のくだを
右つ左つゆきゝすは
そも何ならん何ならん
乙女の姿か將または
故郷遠くの土の香か
春の女神の優し手に
いとうるはしく現實の
満足うけしをだまきと
庭の隅なる垣の根に
おくれて咲けるいちらしき
蒲公英の花を見つめたる
雨の瞳にうつれるは
北風寒き満洲の
黄土馬腹に鞭つて
破れし露国乱れしの
中華の国をたてなほし
我が日の本の君と国
千代萬代の後までも
礎かたく東洋の
盟主の国といなさなん
熱風煽る大旆を
印度の国に翻へし
正義の為に三千年の
夢打ちさまし東洋の
南の護といなさなん
其の理想の影なれや
斯くいなさんは日の本の
まこと男の子の勤めなれ
血汐に通ふ男の子の血氣
空拳敢て恐れんや
君に捧げん命なり
国に盡さん命なり
所生は敢へて拒まんや
彼には信ずる所あり
千辛万苦は望むこと

御国の為ぞ何事も
彼の血汐は湧き返へり
覺悟の様は顔にあり
嗚呼されども夕日をば
雲の蔽へる其の如く
彼の眉目は曇りけり
己れの弱き身心の
此の重任に耐ふるやと
疑問とするの一瞬に
涼風吹きて西方の
曇り拂ひて赫々と
夕陽もゆるその時に
心の奥より男の子のよ
血汐ありなば斃るまで
奮へと叫ぶ一声に
生氣五體に充ち満ちて
立つてと笑みて青空を
見上ぐる面は若人の
希望の色に燃えにけり
いで帰らんと彼たてば
をだまき笑みて葉櫻に
宿失へる鶯の
只一声もくる年の
また合はなんの春を待つ
希望の声にぞありにけり
希望の声にぞありにけり。

(第6号<大正7年7月号>掲載)

《作品 4》

俳句

あかん坊

バラゝゝと蒲公英落ちて春の路
シトゝゝと春雨ふるや窓の外
子供泣く後に舌出す小犬哉
勤む身は時計見る事上手なり

物かなし電氣かすめる露の宵

(第6号<大正7年7月号>掲載)

《作品 5》

◎

あかん坊

今年十九か、二十か、年の解らぬ男先づ見たところ二十才内外だね、僕はあかん坊、僕より二十年程早く生れたらしい人間が、人を馬鹿にしたやうな顔をして歩いてゐる。僕はあかん坊で、顔の造作や着物の縞柄は更に解らない。所は円山街道だ。丁度僕の前に来た時一枚の紙片を落した。ひらゝゝは姉さんのハゲピロのよく言ふ形容^(ママ)詩といふ奴だ。君等が知らぬと困るから教へて置かう。僕も悲観したね。せめてビスケットか煎餅ならガサゝゝと落ちてもいいが、あゝまゝならぬは世の中だよ。併し黒ん坊の兄貴がよく言ふ天の與へる所を取らずば天小便をひる。とか何んとかで落ちてゐるものを拾はないと天が小便をひるさうだ。自分が小便をひると御母さんが大変怒るその時のつらさ同病相憫む可し、天だつてきつと御母さんがあるのだらう。優しい自分の御母さんがあれだもの。

拾つてやれ、拾つたが仕末に困る。仕方ない厚田の囁き會へ送つてやらう。紙片といふのが次の通りだ。

———四年間の有耶無耶生活。時来つて我を世間といふ風吹く社会に釣り出す。口も黄、腕も細物、黄口何物を覗うて食ひつき、細腕何物を引きさぐるに足るやと人は言ふ。併し、一團の抱負に生を保てる我は黄口に毒藥二種、腕に筋金ありと信じて疑はず。黄口に含む毒藥二種、何時にても使用し得可く磨きをかけんと思立ちしは今朝幸ひ、閑暇あるまゝ歩を円山公園に運びて一日清遊す。

書に耽けりて倦めば黙想—黙想に倦めば読書す。其の藥や、此の愉快や、車上に笑妓を擁すとも此の藥に引き較ぶべくも非ず。此の愉快やまたいかで越さん。

漸く日も西に傾きかくれば帰路の杖を曳かなんと思へども尚名残惜しみて黙想す。

世の中のことも、前の小川は堰止める小石に逆うて音をたてゝゐるサアゝゝと。

親兄弟に別れを告げて只一人の旅路、右も左も他人の中、善惡ともに他人と交渉の結果のこと、併して人の云ふ社交間の円満たる最も考へる丈の價值ある所だ。社交の円満は各相互虚偽と虚偽との衝突によつて生れる産物であるまいか。よく人が言ふ義理前が悪い世間前があると義理上言ひたいことでも言はない。言ひたくないことでも言ふ。出したくない茶菓でも出す。食ひたい茶菓でも遠慮する。之れが即ち虚偽だ、己れの心に背く事だもの虚偽だ、此の虚偽を行はねば世を渡れず、生存競争の敗者になるだらうか、馬鹿な何の事だ。義理上何々すと言ふ人間は道德觀念の間違つて居る人間だ。こんな人間が多いから嫌になつて了ふ。言ふべきことでも角の立つ事は言はない人は社交の最も円満な人だといふ社界の定論だ。自分は思ふ。此の人が社會にもてると言ふのは、たとひ一時にせよ永久にせよ面白いことだ。考へて價值のあることだ。世間の人は

角のたつことを、己れの信念を枉げずに言ふたり、行ふたりし得る人を求めず、又知らうともしない。此の類の人は、人に求められやうとも、知られやうともせぬものだ自分は此の類の人間になられぬまでも自分の信念を枉げずに、欺かずに行きたい。假令、言行が円満でなくともよい。と思つた一刹那自分の黙想は破られた。後の方の杉林の前に中學生が四五人、一高寮歌の高唱乱舞に彼等も亦愉快なる日漸く落ちんとして、金色箭の如し。小川は変らず小石に逆らふも音はきこえず。何の木ならん白き花、衣を着けたる高き木は中學生の寮歌に驚きてか、微風に誘はれてか二片三片ひらゝと白雪をふらした。

鳥声一声我に帰れと、俗物間にまた足を入れんかな 噫！

(第6号<大正7年7月号>掲載)

《作品 6》

孤獨になく乙女

あかん坊

一、

葉櫻しげる春の宵
うすもやかゝる豊平の
河岸さすらふ乙女子は
音なく流る河瀬みて
此の春逝きし姉君の
よく好まれし讚美歌を
思ひ出して口吟む

二、

あゝ哀れの乙女子や
あゝ哀れの乙女子や
希望と努力と信仰に
やがて輝くその時は
父と母とに別れ来て
姉さへ失ふうらみこそ
盡きぬなげきにあるならむ
つきぬなげきぞあるならむ。

三、

君が心の哀れさよ
都も鄙も人は皆
春の氣分に酔ふ時
君の心の草々は

すぎ越し方を偲びつゝ
秋の銀月てり返す
思いも深き露宿す
思いも深き露宿る。

(第7号<大正7年8月号>掲載)

《作品 7》

世の中

あかん坊

世の中は萬事塞翁が馬、案外の失策より案外の面白い境遇と面黒い社會の一部とを経て、案外の土地で生きてゐます。

私は幸福だと思つて、信ずる或る自分の信仰の本尊に大いに感謝して居ます。私は幸福です。世の中はお茶の子です。だから私は社會の人間を今までのやうに敬ひもしません。うれしくも思ひません。また腹も立ちません。立てもしません。世の中は何段にもなつてゐて、僕等は道草食ふのきな馬及び鹿の組にあると思ひます。世の中の人(マツ)は小惻(マツ)で私は人をはなれた馬です。鹿です。ですから社會の小惻(マツ)組の狭くるしい所より下の場所で、馬鹿が澤山居ないから狭くろしくなく廣々して楽しいです。勝手熱勝手な時に吹き出して恐れ気もない此の野郎、悪しからず思召御容赦下さい。

(第8号<大正7年9月号>掲載)

《作品 8》

俳句

あかん坊

まど下の落葉おとなす秋の雨。
緋にもえし夏たちけらし裏の山。
美はしき乙女心はいたみけり。
山なれど夏は佐保姫の後を追ひ。

(第8号<大正7年9月号>掲載)

《作品 9》

樂しかつた旅日記

あかん坊

自分はトボゞ野中道を歩いて居る。
十六七夜の月ならん、東の端を離れて皎々として我が面を射、清く涼しい玲瓏として玉の如く鏡の如し。名鏡の名あるも宜なるかなと自分は感じ乍ら、友の家へと歩いて居る。歩いて居る道は

一本道だが家は一軒も見えない。自分は今日岩見沢を午後三時半に立つて、新篠津北二号四十二線ときいた許りで尋ねてゐるんだ。

晝の暑さは忘れられたやうな涼しい風は両側の燕麥の上を吹いてゐる。序でだらうが自分の頬をも撫で、行く。月は照る。風は涼しい。虫はなく。静かなことは天下二三らしい。十時か九時か知らんが、生れて初めてこんな清らかな楽しい夜の旅をする。いよゝゝ友の家がわからないけれど、燕麥の中で月と共に語つて寐ようと思つた。此の恍とした景色に包まつて寐ようと思つた。朝日もよい。夕日もよい。眞晝中はまた有り難い。しかも、此の皎々たる月は一層よいやうだ。提灯がいらぬからではない。色々なことを想はせるからでもないらしい。たゞ何となくすきだなんだからよいんだ。なぜすきだ。色々な事を想はせるからだらう。提灯がいらないからだらう。月はいよゝゝ澄む。其の時思出した。

見る人の心々に任せ置き 高嶺にすめる 秋の夜の月。

何となく、重々しく清らけく涼しげでまた小面にくい。風はそよゝゝと吹いては、途絶える。湿気があつて春風のやうに柔かくない。しかしそこが頼しくて虫の鳴くところだらう。蟲声益々蚊々誇る様に悲しむやうに自分を急きたてるやうに、奴小面にくいぞ。友の家はいよゝゝ解らない。そこが嬉しいところでまた焦れつたいところだ。 (数十分経過)

風呂へ入つた。トウキビも食つた。二人枕を並べて床へついた。数年振の友と久闊を語る。實際楽しかつた。話は盡きない。滾々と流れ出ること、流れ出ること、既に一時を打つた。しかしまだ話がある。附近は森々として何の音も無い。そのうちに彼は自分を馬鹿だといふやうな顔をしてゐる。自分も彼を馬鹿にしてゐるやうな顔をしてやつた。かうなると彼が馬で自分が鹿のやうな気持ちがするから、それですぐ寐てしまった。

お日様に笑はれる程寐坊して友に起されて起きた。直ぐトウキビを食つた。外で顔を洗つた。眼前百頃千頃の田畝、大変ひろい。美しい。茫々として際限がなく僅かに東北に當別の夕山、阿蘇岩の巍然たるを見るのみ。此の廣く大きい石狩平原の景色の中に育つ人は無言裡に偉大なる教育を施されるだらう。我が友は幸福だ。晝前を愉快に友と語り、午後幌向へと出て帰つたが、自分は我が友と彼の景色には名残が惜しかつた。彼はまことの我が友であるからだ。また景色は自分に気に入つたからだ。

(第10号<大正7年11月号>掲載)

《作品 10》

招魂祭

あかん坊

野辺の草木も色づきて

人の心もしめやかに

稲も実りし秋の今日

いと厳かにいとまれし

招魂祭は君たちが
拾有余年のその昔
肉弾雪をうちそめて
故国の爲に神となり
または肉やく思ひなし
沙漠の砂に血を枯らし
護国の鬼と異域にて
なられし魂をまつるなり
千里の外に妻や子の
倅したひし兵者は
そも幾人か幾人ぞ
異域の夕御親の
夢に枕を霑させし
若者どもは幾人か
草や假寐の旅枕
つゝを枕の假夢や
夢路に通ふは故郷の
親御か妻か子の顔か
御国の爲ぞ君の爲
忠義一途の兵者の
心の中こそあはれなれ
昨夜は親御の夢に泣き
今日は草木の肥となる
昨夜は妻子と夢に遇ひ
今日はうらみをうちのみて
友のあと追ふあはれさよ
胸のうちこそ偲ばるれ
しかし君等が血と肉に
満洲の土地を染められし
其の甲斐ありて日の本の
歴史は錦をつけにけり
御国が世界の強国と
なりしにせめて憂はらせ
逝きにし君より後になる
親や妻子は年々の

此の日にこそは人知れず
昔を想ひ目はかすまん
其れなる哀れを知られかし
上、陛下にも君たちの
功勞深く思召し
いともねんごろの御祭
下、臣民の吾々も深く君らに感謝して
君らが瞑福祈るなりこれをもつてや
心をば慰してたもれや人々よ
御国の爲に旅立ちし
我が忠勇の武士よ。

(第10号<大正7年11月号>掲載)

《作品 11》

あかん坊

大正八年を迎へて吾人如何なる感や生ずる。如何なる感を以て迎ふべき。芽出たきを以て内外、俱に埋め、且つは飾る可きか。如何。顧みてまた如何なる情をや湧出せしむ可き。前途の道程を見て如何なる覚悟の生ずるや。開け行く御代の有りがたさ、文明の流れに浴し各地悉く平和なり。平和なるが故に屠蘇に酔ふて芽出度く迎年し、芽出度く送年すべきか如何。かゝる疑問をもつて我れ此処に自分の疑問の一部を述べ、ともに諸兄の意見をもきかん。

帝国の現在、日本の前途、東洋に於ける日本の使命、我々が君国に対する責務を以てこれを解くは男子の取る可き態度と思ふなり。故にこれを以て解けば男子として男らしく意見を吐き、男らしく実行し、国家の前途を憂ひて国家のために勉励し、奮闘し一事一行悉く国家を基礎とせる主義の本に成すの感を持ちて新年を迎へ、迎へて一層此の感を深からしめ、過去もこれを標準として批判し以て前途に進む援とし、必らず此の正義の下に弊れん覚悟ぞ生ぜしむ可きと思ふなり。愚見を陳開して諸兄の意見を蔽く。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 12》

くどき節

あかん坊

世には名利に馳る輩あり、權門に阿諛する徒あり。嗚呼彼等は哀れなりと、我れ人生を超越せし如き事言へど事實は人生の穴にあり。そは一事をなすに當り事に連れて生ずる名誉これを無視する能はず。時としては名その物を目的として事をなさんとする傾きあり。金、そも何物ぞ、俗た

らば天下の大俗たれ、雅たらば天下の大雅たれとは口にすれども雅とも俗ともつかず矢張り昇給せんか人と俱に喜び、昇給せん、手當を呉れんと言へば亦笑むこと多し。權門に阿諛はせず、されど、長者にすべき礼ともすれば阿諛の形に近づかん。とす。また如何せん。『私はまだ悪いことをした覚えありません。』と言ふ如き顔をし、且つ僕はまだ人道に背かずと吹けども省みて少しく受太刀の気味なしとせず。果斷なれと語りつゝ昔のくりごとくどく時あり。またくどい哉斯く煎じ詰むれば、我は人生を超越する能はざる徒か、凡俗の徒か、なさない哉、此に囁の一部を借りてくどき出し二度と再びくどかざらんとす。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 13》

きかれたら答へたい

あかん坊

お前は死ぬために生れたか、生きるために生れたか、子供を生むために生れたか、・・ときかれたら、死ぬために生れた。と答へたい。なぜ死なぬときかれたら、死にたくないし死ぬ時が来ないからと答へたい。何をして生きて居るときかれたら、好きなことをもくろんで生きて居る。と答へたい。生きて居て楽しいかときかれたら、楽しいと答へたい。なぜかときかれたら苦勞を時々するからだ、と答へたい。そんならなぜ苦勞をし通して居ないかときかれたら苦勞がきては逃げて行く、と答へたい。なぜ逃がすときかれたら苦勞後の愉快を加へて其の楽しみの味を大にしたからだと答へたい。苦勞の来たのを逃がしては、末には苦勞が来なくなりませんか、ときかれたら、一生大^(ママ)低^(ママ) 来ることになつてゐる。と答へたい。なぜときかれたら、天下の青年を以て此処五十年程任じてゐるからと答へたい。なぜお前は青年かときかれたら望みがあるからと答へたい。御前の望は大きい小さいかときかれたら、見たことがないから知らないと言へたい。そんならいつ達せられるときかれたら、解らないと言へたい。大^(ママ)低^(ママ)の豫算はときかれたら、一生かゝると答へたい。其の中に死んだらときかれたら死ぬ爲に生れてきたのだからしかたない。と答へたい。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 14》

南瓜

あかん坊

小母さんに南瓜を沢山蒔いたし、肥も沢山やつたから秋には沢山たべさしてあげるよと言はれたのは、丁度昨日今日のやうな心持がして居ますのに早やその南瓜は大半、小父様や、僕らの腹の中へ入つてしまつて、影もありません。漸く難をのがれ二個は屋根の上で肌寒い秋風にひとり不遇を訴へて居るやうに見えてゐます。

歳月のゆくは梭の飛ぶよりも早いと言ひますが、自分の今年は、南瓜の消長によつて、かへりみ

れば鉄砲玉のとぶより速やかだつたと思ひます。速かつたと思ふだけ、印象の少ない夏であつたと思ひます。

人々は、『牛歩千里の外を見んのみ』なんて言ふけれど矢つ張り、過ぎると歳月は水の流れたなんて愚痴こぼす人が少なくないやうです。私もその中の一人でせう。しかし、我が神聖なる囁会の諸君よ、流れの歳月は如何とも致し兼ねるが、いつれの道にたづさはつても、其の目をば愉快に自由に、平和に、また歳月を水と流さずに、兎に角も一度はのんで色ある水として流し出しませうではありませんか。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 15》

あかん坊

秋たけて想を月にはしらせば、我れを呼ぶなり母の優かほ。
秋やくれん日や落ちなん月や出ん我が故郷の河のわたりに。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 16》

木の葉ちり侘しき増しぬ山住ひ。 (あかん坊)
秋の日を短かくおくるひねもすを。 (全 人)

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 17》

故郷

あかん坊

師走も近き日曜の
夕やけ窓にながめつゝ
北のねぐらにたちかへる
群の鳥に故郷の
空をはるかに偲びけり
奇勝のルーラン北にして
三吉山もおもしろく
西なる海は怨なれ
一春一春うらさびて
夏を春と入れかへし

村の稼人一人減り
二人と散るも重ぬれば
いつしか減れる人の数
我れ故里を出で、より
三とせ四年は経ぬれども
春々よきの便言
いたらぬことぞ悲しけれ
たゞ希くばすぎし日の
怨を消さん種ぞ出よ
怨を消すの種ぞほし
秋や畑の芋ほりや
忘れがたきの行事なり
睦月も近くなりぬれば
平和は村を立ちこめて
たゞくる鯿待ちにける。
昔の事ども思ひ出で
母校の窓もなつかしく
昔の友も浮み出で
想ひもつきぬ秋のくれ。

(第11号<大正8年1月号>掲載)

《作品 18》

私のすきな月夜

あかん坊

月夜はどの月夜もよい、春でも夏でも秋でも冬でもよいしかし中でわけても冬の月夜が僕はすきだ
室の窓より見てゐたら往來を歩るいての感じが四季通じて二月の月が一番よい様な心持がする
ギイ^(ママ)々々と言ふ履物の音、北海道の冬の月夜の特徴である。僕はなんと云ふても冬の月夜が一番
す^(ママ)ぎだ(終り)

(第12号<大正8年2月号>掲載)

《作品 19》

和 歌

櫻 桃

*

ふるさとの浜にさゝやく春雨に

男の子の意久地たてませとある。

＊

戀しさに己が書宅の窓見れば

こぞの樂書そのまゝにある。

(第4号<大正7年5月号>掲載)

《作品 20》

何もなくて何事もなく御代の春

あかん坊

(第12号<大正8年2月号>掲載)